第4節　光構内（御手洗遺跡・月待山遺跡）の調査

1．基幹・環境整備（擁壁安全対策）工事に伴う確認調査

調査地区　光構内

調査面積　約132㎡

調査期間　令和3年2月8・15・16日

調査担当　田畑直彦

調査結果

当該工事は、擁壁安全対策に伴い既存の護岸を撤去して新たに擁壁を設置するものである。調査地は埋蔵文化財包蔵地ではないが、学生宿泊施設（学生実習宿泊棟）敷地を含む海岸沿いには、18世紀末に萩藩によって室積会所が設置され、『防長風土注進案』によると、1805（文化2）年に回船の荷揚波戸一カ所が「撫育方御蔵会所沖手」に築かれたとされる[註1]。また、光構内では、昭和58年度の自転車置場設置に伴う試掘調査[註2]で割石積の石垣、平成12年度の護岸石積改修工事に伴う立会調査[註3]で円礫を使用した石積みが検出され、近世～近代の陶磁器が出土している。

上記から、工事予定地内でも近世～近代の護岸や埋立地に関連する遺構・遺物が検出される可能性があるため、令和元年度第8回埋蔵文化財資料館専門委員会（令和2年3月30日（月））の審議を経て、確認調査を行った。工事では、護岸に沿ってL字状に掘削が行われ、2月8日に調査区西部（北西－南東ライン）、2月15日に調査区東部（北東－南西ライン）で調査を行った。また、2月26日に排土に含まれている遺物の調査を行った。

調査の結果、北西－南東ラインの南西壁では、現地表下約110～167㎝で、層厚約27～70㎝で瓦片を大量に含むにぶい黄褐色（10YR4/3）粗砂を検出した。瓦はいずれも砕かれた桟瓦片で他に陶磁器が出土しなかったため、詳細な時期は不明である。砕かれた瓦片は透水を目的にしたと考えられるので、この層は近世もしくは近代の石垣の裏込土であった可能性がある。また、図19で示したようにこの層は調査区北・南側へ続いていると推測される。

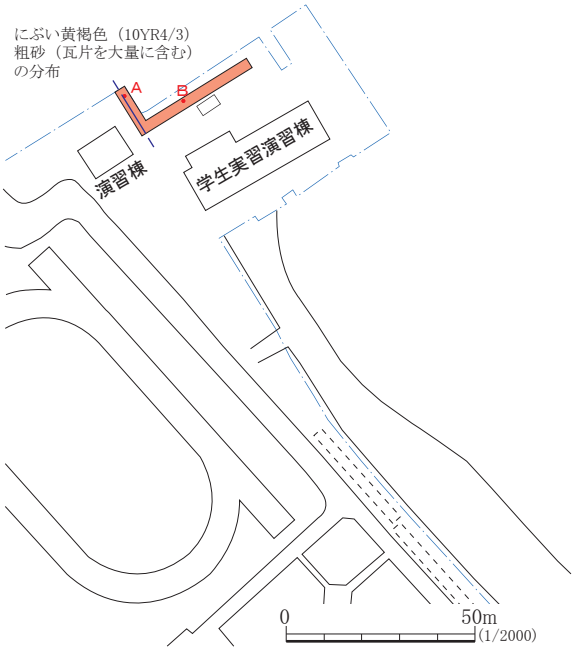

図 19　調査区位置図

写真41　調査区西部調査前状況（東から）

写真 42　調査区全景（北東から）

写真 43 調査区西部土層断面（東から）

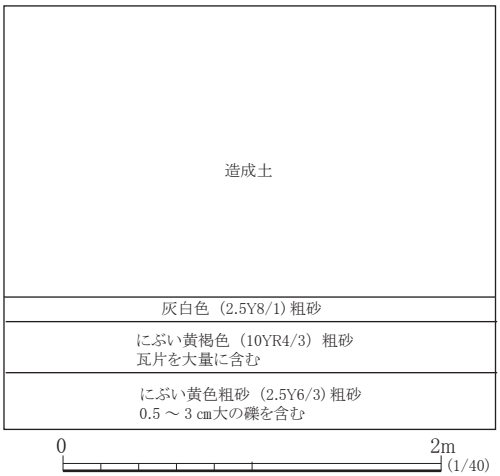

図 20 A地点土層断面柱状図

写真 44 調査区東部掘削状況（南西から）

写真 45 B地点土層断面（北西から）

北東－南西ラインの南東壁では旧地表から最大で約150㎝まで掘削が行われたが、全て造成土であった。

なお、造成土（排土を含む）からは、土師器及び近世～近代の陶磁器が出土した。

今後の調査で、瓦片を大量に含むにぶい黄褐色（10YR4/3）粗砂の分布や時期の確認が必要である。

【註】

1）山口県文書館（編）（1963）『防長風土注進案第七巻　熊毛判』,山口

2）森田孝一・磯部貴文（1985）「教育学部附属光小学校自転車置場設置に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』,山口

3）田畑直彦（2017）「教育学部附属光・中学校護岸石積改修工事に伴う立会調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ＸＸ』,山口